

第42回
シリーズ探訪・探求

訪りたいまち

おおわにまち
青森県大鰐町

官民協働で田舎町再生に

取り組むまち

大鰐

津軽の奥座敷として古くから親しまれてきた大鰐町。青森県津軽地方最南端に位置し、温泉とスキーの観光の町として繁栄してきた。

現在、人口減少や高齢化の進行、厳しい財政状況など困難な課題を抱えながらも、津軽藩の湯治場として利用されていた温泉や「大鰐温泉もやし」などの伝統を生かし、「湯の郷・雪の郷・りんごの郷おおわに」の実現を目指したまちづくりを進めている。

温泉とスキーの町

大鰐温泉の歴史は、800年以上前ともいわれ、当時、東国行脚中の仏僧、円智上人が発見したと伝えられている。また、文禄2年（1593年）に津軽初代藩主為信が眼病にかかった際、夢に見たお告げに従い、大鰐の温泉で目を洗ったところ、眼病が治ったという言い伝えもある。

史実には、慶安2年（1649年）に津軽三代藩主信義が、大鰐に御仮屋を設け、湯治をしたという記録が残っている。明治28年には奥羽本線大鰐駅が開業したことから大勢の湯治客でにぎわうようになった。現在で



湯魂石薬師堂

眼病が治った津軽初代藩主為信が、感謝の意を込め大石の上に祠を建立し、名付けた



大正元年創業の「まみや煎餅店」の店主 間宮 稔さん。「豆煎餅は、水の代わりに国産はちみつを使っているのが特徴です。豆を限界までいれているので食べごたえがあります。ごま煎餅は、青森県で一番硬いですよ!」



本堂



手水舎

大円寺

住職 工藤 弘典さんと大日様

も、昔ながらの公衆浴場や温泉旅館が数多く立ち並び、町外から観光客を呼び寄せる重要な観光資源となっている。

また、大正11年には大鰐で初めてスキー講習会が行われ、大正14年には「全日本スキー選手権」が開催、以降競技スキーのメッカとなっている。

謎多き「大鰐の大日様」

町の中央に位置し「大鰐の大日様」と親しまれている大円寺。その起源は、奈良時

代に、聖武天皇の国分寺建立に際し、本尊大日如来を阿闍羅山の大安国寺に安置したことに始まる。

本尊大日如来は、大正9年に国宝に指定され、昭和27年には国の重要文化財に指定されたが、この本尊、実は大日如来ではなく阿弥陀如来像なのである。なぜ阿弥陀如来像が大日如来と呼ばれ、信仰されてきたかはわかっていない。工藤住職にお話を伺った。



手水舎

「津軽地方には、自分の生まれた年の干支を守り神として信仰する

一代様という独特の風習があり、人生の節目に、自分の一代様にお参りする習慣が藩政時代から続いています。大日様は未申の守り本尊です。大日如来はすべての元で、阿弥陀如来など他の仏様に姿を変えたとされています。未申の守り本尊がなかったため、阿弥陀如来像を大日様として祭っていたのではという説もあります。また、仏像は、古くから言い伝えがありますが、平安から鎌倉時代にかけて作られたのではないかと考えられています」

町の危機と

「OH!! 鰐元気隊」結成

バブル期にスキーリゾート開発を推進していたが、バブルの崩壊に伴い温泉施設は閉鎖に追い込まれた。町には多額の債務が残され、平成20年に財政破綻の懸念がある「早期健全化団体」に指定された。町が疲弊していて、親が子どもにも「この町は借金でもう駄目だから、おまえはいい学校に入って東京に就職しなさい」というのが、当たり前の会話だったという。この言葉が現実になってしまったことに危機感を抱いた町民有志16人が、平成19年に町おこし団体「OH!! 鰐元気隊」を立ち上げ、地域再生に向けて動き出した。

平成20年から、大鰐小学校の5・6年生全員をメンバーとした「OH!! 鰐元気隊キッズ」も活動している。「OH!! 鰐元気隊」の発起人(プロジェクトおおわに事業協同組合 副理事長の相馬さんは「OH!! 鰐元気隊キッズ」の活動が、「OH!! てか」というと、子どもと親に意識改革を促してもらったためです。キッズと清掃活動をするときは、大人は子どもたちに大鰐のよい所だけを話すというルールを設けています。そして秋には東京飯田橋にあるアンテナショップで、自分が作った大鰐高原野菜



プロジェクトおおわに事業協同組合副理事長 相馬 康寛さん。大鰐町PRのため、全国を飛び回る。「今後、温泉ブックカフェにして、ゆっくり滞在して欲しいと思っています。近隣の市町村ともコラボしながら、地域全体が元気になる取り組みを行いたい」と熱く語った。

を売るという販売体験学習を行っています。この夜には、一流レストランのシェフや、大企業経営者、百貨店のバイヤーなど著名人をお呼びしパーティーを開催して、著名人から子どもたちへ大鰐町のよい所を発信してもらっています。子どもたちは、この交流を通し、大鰐の良さを確認し、町に自信と誇りをもって戻り、親に「大鰐が借金で駄目だというのは間違っている。東京のすごい人たちがよい所だと言ってるよ」という話をします。その親から、「大鰐の良さを子どもから気付かされた。」という感謝の電話が毎年きます」と語る。

人生かけて

日本の田舎町再生の

お手本づくり!!

平成20年秋に、町営だった日帰り温泉施設を備えた大鰐町地域交流センター「鰐home」が指定管理者を募集すること



「茶臼餅」や「マルシチの味噌」などの大鰐名物

産直・売店「メルカート」



「しいたけ」や「山菜」などの旬の地元産野菜



大鰐温泉観光案内所

平成28年12月に「大鰐温泉観光案内所」を開設。左から、観光コンシェルジュの藤原さん（地域おこし協力隊）、山田さん、藤森さん



朝礼から1日が始まる。売り上げ報告のほか、「あっち向いてほい」や、隣の人の良い所を褒める「いいねータイム」の時間もあり、従業員がリラックスして笑顔で仕事にとりかかれるようになる。ほかにも、「今日は何の日」を従業員全員で共有し、お客様とのコミュニケーションのきっかけにして、お客様を名前でお呼びできるようにしている。

大鰐町地域交流センター「come」

になった。経営は赤字続きで、指定管理料0円という条件であったが、「OH!! 鰐元気隊」発起人のうち家族の同意が得られた者9人で出資し、まちづくり会社「プロジェクトおおわに」事業協同組合を設立し、指定管理者へ応募した。「プレミアム付き温泉入浴前

売券の売上と、組合費を合わせ1000万円ちよつとの運転資金でスタートしました。金融機関からの借入金なしでスタートし、今までも運転資金の借入れはしていません。奇跡の無借金経営です（相馬さん）。町から引き継ぐ際に、従業員を全員再雇用し、社員のスキルアップ研修を徹底して行い、意識改革に取り組んだ。ほかにも、売店を改装し、お土産屋から産直市場へ変更するなどハード面の変更も行った結果、指定管理初年度から黒字経営を達成した。

「鰐come産直の会」も立ち上げ、従前全くお金にならなかった規格外の野菜などを販売した。鰐come内だけではなく、首都圏へも出荷しており、本年度は売り上げが4000万円を超える見込みで、町の経済に好循環を生みだしている。「鰐comeは、常に世界一を目指しています。地域一番ではダメで、隣町に良い施設ができるかと負けてしまいます。定休日も朝礼を行い、清掃と従業員のスキルアップ研修を継続して行っており、企業として当たり前な事を、ぶれずにを行っています」（相馬さん）。

大鰐温泉もやし

温泉熱と温泉水のみを用いる独特の栽培方法により、少なくとも350年以上前から栽培されてきた伝統野菜で町の特産品。長さが30cm以上もあり、独特の芳香とシャキシャキとした歯触り、味の良さ、品質の高さで人気が高く、優良な大鰐産品の先兵である。

作り方は、一子相伝で代々受け継がれてきたが、生産者が一時期4軒にまで減ってしまったことから、町が2005年から後継者確保に乗り出し、現在7軒で栽培している。主に冬期間の栽培だったが、現在は、2軒の農家が通年化にチャレンジしており、一層のブランド化、増産に取り組んでいる。



昔ながらの土耕栽培。原料は、大鰐町にだけある品種「小八豆」。一度栽培に使用した土は、土の栄養分を補強するため、温泉をかけて1年間寝かせる。



大鰐温泉もやしラーメン。近年は、イタリアン、フレンチの食材としても使われている。



弘南鉄道大鰐駅舎

弘南鉄道大鰐線存続の 取り組み

弘南鉄道大鰐線（中央弘前―大鰐間13.9キロ）は、利用者が大幅に減少し大変厳しい状況に置かれており、平成25年に廃止の方針が表明された（後日撤回）。これを受け、弘前市と大鰐町、国などが平成25年8月に「弘南鉄道大鰐線存続戦略協議会」を設立し、運行存続に向けた協議・検討が継続的に実施されている。

平成27年度には、各種企画切符の販売など多様な利用促進策を講じるとともに、沿線の中学3年生・高校生に公共交通での高校通学を促す情報を掲載したカタログやブックカバーを配布したほか、沿線住民には事前アンケートに無料乗車券な



弘南鉄道大鰐線往復乗車券と「鱧 come」入浴券・お買物券付きお得意さっ「さっパス」は月に300枚以上も売れているロングヒット商品!

どをつけ事前と事後にアンケートに添える過程で自然と利用意図（利用してみようという意識）の活性化を図るトラベル・フィードバック・プログラムを実施するなど、対象を明確化した戦略的な「モビリティマネジメント」を展開した。

また、事業者はもとより、商店街・学生・住民・NPOなど多様な主体が参画し「つながれ！大鰐線つなごう！みんなの交通コンソーシアム」を設立し、イベント列車なども企画している。

この結果、利用者増加という明確な成果をもたらし、平成28年地域公共交通優良団体国土交通大臣表彰を受賞した。

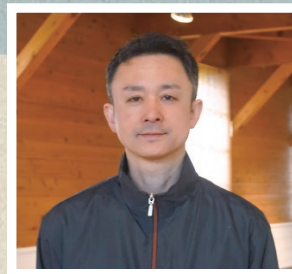
今後も、地域の関係者がそれぞれ役割を分担し、地域づくりと一体となった取り組みを継続することにより、大鰐線の一層の活用を図る（つなごう）。



JR東日本寝台列車「四季島」で使われているお弁当箱は、「わにもっこ」の製品。東京の有名企業からの注文も多い。

わにもっこ

「古くから林業が盛んな地域でしたが、昭和50年代に外材が入ってきて価格が暴落しました。そこで、『林業に付加価値をつける何かを』ということで『わにもっこ』を平成元年に設立しました。現在、約7割は県産材を使っており、注文を受けて青森ヒバを使った浴槽などの大きな物から、おもちゃなどさまざまな物を作っています」と語る山内 将才さん。



展示館「こかげ」

この町には、町を愛し、自分たちの力で、人生かけて、まちづくりに取り組んでいる人がいる。そして、その取り組みをたくさんの大鰐ファンが、町外からも応援している。

温泉に漬かり湯（ゆ）つくりと滞在し、この町の魅力、そして、町民の熱意を感じてもらいたい。

●地域づくり表彰とは

創意と工夫を活かした広域的な地域づくりを通して、個性ある地域の整備・育成に顕著な功績があった優良事例を表彰することによって、地域づくり活動の奨励を図ることを目的に、昭和59年度から実施。

●地域公共交通優良団体国土交通大臣表彰とは

地域公共交通に関する取り組みが他地域の模範となるような顕著な功績がある団体を表彰することで、優良事例の情報提供などを図ることを目的に、平成21年から実施。

大鰐町ホームページ
<http://www.town.owani.lg.jp/>



歓迎大鰐町

※ 利用者一人一人の移動が社会にも個人にも望ましい方向に、自発的に変化することを促すコミュニケーションを中心とした交通施策意識改革を働きかける施策